

魅力ある言語活動で主体的に学ばせる国語科の単元づくり ——「国語科教育法」の授業を振り返って——

鈴 村 文 子*

Developing Learning Units with Attractive Language Activities to Encourage Proactive Learning Looking Back on the Lesson “Education Method of Japanese Language”

SUZUMURA Fumiko

要 約

言語活動の一層の充実が求められているが、言語能力を育成する根幹となる国語の授業は今も不人気である。学び手が主体的に取り組まなければ、力につかない。また、言葉の力は言葉を使う場面で鍛えられるものである。児童が「国語の時間が楽しみ」と言って学び出す学習にするには、魅力ある言語活動を設定し、指導内容と結びつける単元づくりが有効であることを「国語科教育法」の4回の授業で追究しようとした。

初回の「読みを生活に生かす」をテーマにした授業について、学生に提供した資料や活動を振り返り、事前課題、言語活動の設定、学生の学びの点から改善策を考えた。本学の1年生の実態を踏まえ、大学で求められている学び方を取り入れて、学生が主体的に学ぶ授業にすることが今後の課題である。

キーワード：言語能力の育成 主体的な学び 魅力的な言語活動 単元づくり

1 はじめに

中部大学現代教育学部1年前期の教育科目「国語科研究」の授業で、「小学校の国語の時間は楽しかったか」と尋ねたところ、「楽しかった」と挙手した学生は1割程度であった。筆者が教職に就いた頃、国語の授業に人気はなかった。国立教育政策研究所が発表した平成28年度全国学力・学習状況調査の「質問紙調査の結果」を見ても、「国語の勉強は好きですか」に「当てはまる」と答えた児童は23.9ポイントで、算数の38.8ポイントに比べ、約15ポイントも低かった。全国で国語科授業の改善が推進されているはずなのに、まだ、国語好きな子が少ないのは残念である。

教師が楽しくなければ、児童が楽しいと思えるわけがない。児童の学びを考えていろいろ準備し、わくわくしながら教室に行けば、おのずと児童に楽しさは伝わる。教師を目指す学生には国語の楽しさを実感して現場に出てほしい。全教科・領域で言語活動の一層の充実が求められている今、その要にある国語科授業の言語活動は目的を明確にし、児童が学ぶ楽しさを味わえるものにしたい。

教師を目指して本学に入学した学生が、楽しい国語の時間を創ろうと学び出すようにするには、1年後期実施の「国語科教育法」の授業で、何をすればよいのかを考えた。筆者は、小学校の国語教室で、児童が課題を決め、活動を選び、計画を立てたとき、楽しんで学び出す姿を見てきた。学生に、それを伝え、国語科の特質を生かした言語活動を主体的な学びにする単元構想を考えさせたい。学生に、単元の

* 中部大学現代教育学部現代教育学科 教育実習センター

目標を明確にし、見通しをもたせる授業づくりを経験させることは、将来、国語の授業が好きになる児童を増やすことにつながると考え、実践した。

2 実践の概要

授業計画15回のうち筆者が担当する第5回から第8回までのテーマを「国語の時間が楽しみになる授業づくり」とした。事前に課題を出す必要があったので、第1回の授業で目標や内容、事前課題等を次のように知らせた。

○期待される成果と目標

・「仕事は楽しく、工夫して」

大学3年生で予定されている教育実習が待ち遠しくなるような国語の授業づくりを考えます。自分が楽しくない授業は児童にとっては苦痛そのものです。

・「見通しをもたせて意欲を喚起」

4人グループで演習します。指導案を作成し、授業の導入部分(約10分間)を実演して見せ合います。児童役の3人に学習への期待がもたせられれば成功です。

・「文字は人を表す」

書写は、手本を見る力と目標をもった練習が鍵です。文字を整えて書ける先生は素晴らしい。文字の乱れは教室環境の乱れにつながります。その日の作品を採点します。

・「書くことは考えること」

教員採用試験では、教師への心構えの確かさが問われます。今、自分がいる人生の位置を見定めて文章を書き、児童に示す教材作りをします。生き方にも授業にも真剣さが表せる先生に、6年生の児童は尊敬の念を抱くことでしょう。

○授業のテーマと教材・事前課題

第5回 読みを生活に生かす

4年「ごんぎつね」を教材に単元づくり
児童に勧めたい3冊の児童書を持参

第6回 課題をもって書く毛筆書写

3年毛筆書写の基本を学ぶ単元づくり
用具一式と「光」の試書1枚を持参

第7回 読めと言わずに読ませる工夫

2年「たんぽぽのちえ」を教材に単元づくり

動植物に関するクイズ2問を用意

第8回 「先生」も書いて教材作り

6年「随筆」を書く

教師を目指す動機・長所の作文メモ

以上のように学年や教材を決めたのは、小学校学習指導要領にある「読むこと」「書くこと」「書写」の指導内容の系統を児童の発達段階と合わせて注目させるためである。

「ごんぎつね」を取り上げたのは、多くの教科書で教材になっているので、学生が読んだ経験があるだろうし、指定図書『小学校国語科教育法ノート第二版』(高木徹著 学術図書出版社 2014年)に掲載の教材文が活用可能と考えたからである。

小学校3年生の書写については、児童が初めて学ぶ毛筆書写の基礎的な指導を考えさせるためである。

低学年の説明的文章「たんぽぽのちえ」を扱ったのは、時間の経過と知恵の順序の関係把握が容易なことと、「なぜでしょう。」「○○だからです。」の文例を活用したクイズ作りに移行しやすいためである。

高学年用として「随筆」を選んだ。随筆を書くことは、現行の小学校学習指導要領(平成20年文部科学省告示第27号)で初めて示された言語活動であり、現場では教師の戸惑いが見られた。教材研究として、教師も書いてみると指導のポイントがつかめる。また、記述前の取材活動が思いのほか大変なことも実感できる。

3 「読みを生活に生かす」単元づくりの実践

(1) ワークシートで推薦図書を紹介する

本への憧れを育てる授業の工夫として教室の雰囲気作りがある。学生が推薦図書を3冊用意してきているので、筆者も中部大学図書館から児童書30冊を選んで教室に並べ、環境を整えた。

多様な言語活動の手始めとして、「本を紹介しよう」という活動を体験させた。推薦図書3冊の中から1冊を選んで紹介文を書くとき、相手に分かってもらうために、作品を正確に読み取る力と表現する力が必要になる。これらの力を養う学習が役立ち、伝え合う喜びにつながる見通しがもてれば、意欲が高まると考える。

書くことの抵抗を減らすワークシートの工夫例と

して、書く量は少なく、カットもある楽しい用紙を配付した。ノートや原稿用紙ではなく、学習のねらいに合わせたワークシートは学習効果が期待できる。字数は少ないが、内容を短く的確に書くところに、児童の学びが生み出せる。

(2) あらましを読み取る方法を知る

作品の内容を読み取る方法の一つとして、『白石範孝の国語授業のつくり方』(白石範孝著 2009年)から「文学を読む10の観点」を紹介した。

- ①いつ、②どこで、③どんな人物か、④だれが中心か、⑤どんなことが起こったか、⑥変わったことは、⑦一番大きく変わったことは、⑧お話の図、⑨一文で書くと、⑩声に出して言える言葉・文

これら10の観点を書いたカードを黒板に提示した。どの学年でも通用する読み方であることを確認し、紹介文には⑨の一文に仕上げたものを書けばよいことになった。しかし、この読み方でも学年によって重点を置くところが変わってくる。4年生の学びとしてどこに重点を置くべきか、該当学年の指導内容を理解するために、『小学校学習指導要領解説 国語編』(以下『解説』とする)を活用することとした。

(3) 『解説』を読む

現場の教師の中には研究授業をするときでさえ、教科書の指導書だけに頼って、『解説』を見ずに指導案を書いてしまうことがある。時間不足を理由にせず、指導内容の系統を踏まえて目標を決めるために、必ず『解説』を読みたい。現行のもの(平成20年8月発行)は、それぞれの領域に系統表があるので理解しやすくなっている。

11頁の「各学年における各領域の目標」を使って、第3学年及び4学年については、各領域で、目的に応じた表現・理解が特徴になっていることに気付かせた。

次に、22頁の「各学年における『C読むこと』の指導事項」を使って、4年生の「ごんぎつね」を教材にするときの中心となる「文学的な文章の解釈に関する指導事項」に着目させた。「場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて叙述を基に想像して読むこと。」

については、低学年の「登場人物の行動を中心に」から発展し、高学年の「登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ」ることにつながっていくことを確認した。

ごんの心情の変化を六つの場面を手がかりに読み取ったり、語り手の視点がごんから兵十へと変わっていることに気付いたり、高学年の指導事項に係る優れた情景描写に気付かせたりすることも可能なので、「ごんぎつね」が4年生に適した教材であることを説明した。

また、23頁にある言語活動例の何を選ぶかによって、指導事項が変わることを説明した。

作品の好きなところを音読して伝えるならば、「場面の様子がよく分かるように音読する」技能を身に付けさせ、感想を述べ合う活動にするならば、「一人一人の感じ方に違いのあることに気付くこと」の理解を加える。また、キツネの登場する物語や新美南吉の作品を読むことに限定するならば、「目的に応じて、選んで読むことができるようにする」ことが目標になる。

このように、「ごんぎつね」という作品を読む目的と言語活動の関係をはっきりさせて指導内容を決め、言葉の力を養う授業を計画することを確認した。

(4) 児童の実態を知る

愛知県知多地方で使用されている教科書『国語四下 はばたき』(甲斐睦朗・高木まさき編 光村図書 2015年)では、「ごんぎつね」は10月に配置されている。秋の読書週間に図書館行事と関連させて、本を紹介する単元にするならば、児童の読書傾向を把握しておくことが必要である。また、作品を読んだ経験の有無や新美南吉の作品への関心も調べておきたい。さらに、主人公の心情の変化を読み取ることに関して、4月の「白いぼうし」での人柄の理解や6月の「一つの花」での情景を読み取ることの習得状況、夏休み前の読書単元での興味関心と夏休みの課題にした読書感想文などから、児童一人一人について読むことの課題を把握しておくことが必要となる。これまでの授業の反省も含めて、児童の読み取る力と課題を把握した後に、指導案が書けることを伝えた。

知多地方の小学校で参考にしてしている「知多地方教

育計画案」の「第4学年国語科年間計画（標準215時間）」の一覧表を提示して、単元の実施時期から中心となる指導内容を確認した。1学期の学習に続いて、「ごんぎつね」では、場面ごとの心情の変化を読み取る。その後、11月に心に残ったことを感想文に書き、3月には、感じたことが伝わるように音読する学習へとつながっていく。限られた時間の中で確実に力をつけるために、学びの関連を把握することも必要である。

(5) 教材研究をする

今回は、「ごんぎつね」の文章について実際に教材研究をする時間はとれなかった。前述の「文学を読む10の観点」を使って、キーワードである「ひとりぼっちの小ぎつね」と「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か」に注目させた。また、場面が変わると心情も変わることと情景が心情を表している叙述については必ず学習させることを押さえるに留まった。

教材にする作品は、読み込んでよさが分かってから授業に使うのがよいと思っている。作品の主題、構造、語りの視点、特徴的な表現技法、難語句、作者などについて調べておくことは、児童の多様な考えに対応できる余裕を生む。どの教科指導でも同じだが、教師は実践者であり、研究者でもありたいことを伝えた。

(6) 魅力的な言語活動を選び、単元計画を立てる

指示待ちでなく、学び出す人にするためには、見通しをもたせることが肝要である。筆者は、児童とともに単元の計画を立ててノートに書かせ、学習の流れの見える化を図ってきた。単元のスタート時点で、ゴールの姿を描かせる。ときには、単元に入る前から予告をして関心を高めておく場合もあった。具体的に作品や発表場面を見せておくとう理解されやすい。時間数も示し、時間内で納めるように割り振った。児童がよりよいものを求めたければ、家庭学習で補ってもよいことにしてきた。

学習課題は、児童の興味や関心を把握し、指導者も魅力を感じるものを設定したい。教師が「またあの活動にしておこう」という安易な思いで計画すると、新鮮味は薄れ、児童にマンネリ感を抱かせてしまう。学生が「物語文の授業は、感想の話し合いや

感想文がお決まりで楽しくなかった」と回想したそのマンネリ感を、指導者になったときに児童に抱かせないようにさせたい。

① 豊富な言語活動例を示す

南吉が生まれた半田市では、「ごんぎつね」を読み取るときに、半田市教育委員会発行の『南吉のふるさと』という副教材を活用している。92頁の冊子には、新美南吉の生涯についての説明や作品の紹介、新美南吉記念館の見所を含めた文学散歩案内、「ことば絵辞典」の項目もある。

4年生は、掲載されている「学習のてびき」によって、行動と心情を場面ごとに読み取ってワークシートに書き、「ごんぎつね読書会」を開いてグループで話し合う。読書会のテーマは7例あり、読み取ったことを活用できるようになっている。「読書会」のほかにも、読み取ったことを活用する多様な言語活動例が「南吉学習」として紹介されている。

授業では、『南吉のふるさと』を4人のグループに1冊ずつ見せ、遊びや学校生活と結びつけた言語活動もあることを知らせた。言語活動の例は、以下のように多様である。

- ・ テーマを決めて南吉について調べ、南吉になったつもりでインタビューに答える。
- ・ テーマのある読書をして、ペープサートで作品紹介をしたり、絵本や文集にまとめたりする。
- ・ 好きな作品を絵に描いて紹介する。
- ・ キツネが登場する南吉作品を読んで、読書カードや葉を作る。
- ・ 作品紹介のパンフレットを作る。
- ・ 南吉作品に出てくる方言を調べる。
- ・ 南吉に関するクイズを作る。
- ・ 南吉カルタを作る。
- ・ 南吉すごろくを作る。
- ・ 南吉の生涯を演劇で表現したり、自伝に表したりする。

② 本の帯の実物を見せる

百聞は一見に如かずの言葉に従い、粗筋の一部と感動した描写場面を視写し、キツネの絵を貼った「本の帯」を作って、「ごんぎつね」の絵本に巻いて見せた。物語全体を読み取ることと個性が表れる好き

な描写を選ぶことで、人によって感じ方に違いがあることを理解する言語活動例とした。

③ 四つの単元計画を提示する

同じ教材を使って、14時間完了の学習計画を立案するも、児童の実態や指導者の考えによって異なる単元計画になることを資料で示した。

光村図書『小学校国語 学習指導書 四下』から二案、教育出版『ひろがる言葉 小学国語4下 教師用指導書 解説・展開編』から二案をプリントにし、比較させた。

・光村図書Ⅰ案「読んで、考えたことを話し合おう」

登場人物の行動や気持ちの変化を中心に詳しく読み、感想を100字程度でまとめて、グループごとにテーマに沿って話し合う。物語の続きを書いて読み合い、南吉の他の作品を読んで100字程度の感想を書いたものを交流する。

・光村図書Ⅱ案「新美南吉の作品を読んで、友達に紹介しよう」

登場人物の行動や気持ちの変化を中心に詳しく読み、感想を100字程度でまとめて、グループごとにテーマに沿って話し合う。読み方の技法を生かして南吉の他の作品を読み、「ごんぎつね」と比較してまとめ、紹介文に書いたものを交流する。

・教育出版Ⅰ案「テーマを決めて、本を紹介しよう 一副題をつけよう」

登場人物の移り変わっていく行動や気持ちを読み取り、作品のテーマを副題として考えて、発表し合う。ブックトークで紹介する本を複数選び、感想や粗筋を交えて発表する。

・教育出版Ⅱ案「新美南吉の物語を紹介しよう」

登場人物の移り変わっていく行動や気持ちを読み取り、粗筋やテーマ、キャッチコピーを考え、好きな表現を見つける。同じ方法で、並行して南吉の物語を読み、帯・ポスター・リーフレットなどを使って読書発表会で紹介する。

どの計画でも、学習前の児童の不安を「できそうだ、やってみたい」という意欲に変えるために、最終段階の姿を示すことは必要である。例えば、100字程度の感想文の例、南吉の他の作品との共通点や相違点を読み比べて思ったことの紹介文の例、ブックトークの発表例は、用意しておきたい。

田近洵一・北原保雄・三木卓編『ひろがる言葉 小学国語 4下』（教育出版 2015年）の50頁には、「『読書発表会』をしよう」の学習の手引きがあり、「テーマを決めた本のしょうかいの仕方を『ブックトーク』ともいいます。」の説明や学習の進め方、組み立てメモ、3編の発表文例があって、見通しをもたせやすい。続く51頁には、「新美南吉をたずねて」という例文があることで、「ごんぎつね」の読み取りと生活に役立つ言語活動の関係が児童にも理解しやすくなっている。

(7) 指導案を書く

国語科の学習指導案を書くのは初めての学生たちである。14時間の単元全体を見通して言語活動の期待をもたせる第1時の指導案を書かせることにした。「本時」は14時間の中の大切な1時間であることを押さえたい。本時だけうまくいくことは考えられない。本時の内容が途中になったからといって、安易に「続きは次の時間に」と繰り返すことはできない。簡易な形式の指導案もあるが、学習計画を意識するためにも、本時の学習指導の位置付けを形に表す指導案にした。

① 指導案の形式を知る

学校によって指導案の書き方に工夫があるが、今回は、私が書いてきた知多地方の学校の一般的な形式によった。

「知多地方教育計画案国語科例」の「読んで考えたことを話し合おう」の指導案を使って、各項目（1 単元、2 単元の目標、3 学習の計画、4 本時の学習指導、5 備考、6 指導と評価）の説明をした。

本時の学習指導については、目標、教師や児童が準備するものや教科書以外の資料、学習内容が関連する単元名、学習過程（学習の段階に沿った学習活動、形成的評価とその方法を含む指導上の留意事項、時間）、本時の評価基準の5項目を記述する。

備考には、「学級の実態」として目標設定に関係する児童観と、「指導の力点」として指導観や特別な手立てを述べることが多い。

使用した指導案は、第6時のものだったが、第1時のブックトークが単元の見通しをもたせている点で好適であった。

② 第1時の指導案を書く

時間短縮のために、第1時の指導案をワークシート形式にして記入箇所を以下に絞った。

- ・ 単元名は、どんな言語活動か分かるようにする。
- ・ 単元の目標は、言語活動の目標に直結させる。
- ・ 学習の計画では、第1時と第9～14時の言語活動を関係づける。
- ・ 導入段階で、単元を貫く言語活動を伝える。
- ・ まとめの段階に、児童の意欲を予想して書く。

(8) 導入段階を実演する

今年度、国語科教育法の授業のために12枚の小黒板（裏面がホワイトボード）を購入して模擬授業やグループワークができるようにした。4人グループに1枚の小黒板を配付して導入段階の模擬授業をさせた。授業開始後、なるべく早く単元名を板書し、児童の意欲を喚起するためである。当初は10分間の予定だったが、説明時間が延びたため、5分間程度しか実施できなかった。

教室の机が固定式の長机だったので、児童役の3人を1列に並ばせ、教師役は1列分下がって3人が見渡せる位置に立たせて、授業の形を作った。小黒板が固定できなかったため、教師役は板書に苦労していたが、それでも、生き生きと話し、児童役の学生の話をつなぐ聞いて聞いたり、笑顔で発言を促したりしていた。

(9) 他の学生の工夫を考える

4人の模擬授業が終了した後、「最も楽しげな単元になるのはだれの授業かを予想して、その理由も話し合ってください。」と指示して、指導案の裏面に書かせた。

この振り返りは、構成メンバーにより真剣さに温度差があった。

4 成果と課題

学生が書いた指導案を見ていると、筆者の授業の反省点ばかりが見えてきた。

多くの資料を用意して、指導案作成までに考える内容を示すことができた。また、言語活動と指導内容の関係説明にも時間を割くことができた。これら

によって、児童を主体的に学ばせる要素は講義できたが、学生を主体的に学ばせる授業にはできなかった。丁寧すぎる説明は、学生が思考力・判断力・表現力を鍛えて指導案を書こうとする時間を奪い、自ら課題解決しようとする意欲も削いでしまったと反省している。いくつかの課題について、次年度に生かす方策を考えてみたい。

(1) 事前の課題について

学生に3冊の児童書を用意させたが、授業には十分に役立たせることができなかった。

「本の紹介文を書いてみよう」と指示されてもすぐには書けないことを実感させて、目的に応じた読み方の学習が必要なことと、その指導例を示した。しかし、その後は本の紹介文を書く流れにしなかったため、持参した本を活用してブックトークなどの導入を考えた学生は少なかった。また、「ごんぎつね」の作品を味わう時間が設けられなかったこともあった。学生の粗筋理解は不十分だった。

今回のように、3冊の本を指導案に生かす場合は、「推薦図書3冊を選んで、その粗筋を100字程度で書いてくる」という課題にする。そうすれば、読むことと書くことの関連や、指導しなければならない内容も実感できると思われる。事前に渡すワークシートは、字数に合わせ、意欲を高めるデザインにしておく。ワークシートをそのまま本の帯にすることも可能である。あるいは、「ごんぎつね」の教材研究を兼ねて、読書会のレポートを事前課題として用意させることも考えられる。どちらにしても、授業に直結する課題を出し、考えをもって出席できるよう改善する。

(2) 魅力的な言語活動の設定について

学生が選んだ言語活動の多くは、教科書にある「感想を発表し合おう」であった。本の紹介文を書く体験をさせ、手作りの本の帯、読書発表会の指導案、「南吉学習」の活動例を見せたが、多様性は生まれにくかった。

『南吉のふるさと』によって学習例は示したが、活動から生まれた作品の提示はできなかったのでイメージが描けなかったようである。また、本の帯については「作ったことがある。」という声が聞かれ

たので、魅力的な活動とは思えなかったようである。どんな言語活動にしたいかを考える時間が不十分であったのも原因だと思われる。

今回は、第1時に今回の資料を使って指導案を作成する。併せて、活動で生まれた作品や原稿を用意させる。第2時は完成させた指導案と作品等を使って導入部分の模擬授業を行い、生活の場で生かす言語活動と国語科の指導内容との関連を考察するといった余裕ある計画にしたい。

(3) アクティブ・ラーニングの観点について

学生同士の学びをほとんど創ることができなかった。模擬授業の児童役で、ふざけた発言をして授業を妨害することをおもしろがっている者もいた。

今回は、児童の既習内容や興味・関心について話し合いながら、4人で協同して指導案を作り上げるようにしたい。児童役は別のグループの学生にして、児童役の反応を見て4人で指導案の評価を共有できるようにする。

また、学生がどんな問題意識をもっているかについて把握していなかったために、課題を押しつける形になってしまった。「国語は楽しくなかったから、先生になったら楽しい授業にしたいと思っている」と想定して授業を構成したが、学生のニーズにできていなかったと反省する。

解決する手立てとして、学生が受けてきた国語の授業の課題発見から始めるグループワークにしたり、事前の意識調査から学生がテーマを選べるようにしたりすることが考えられる。学生が見つけた課題追究をする模擬授業によって、教師への意欲を高める計画にしたい。

5 おわりに

本稿執筆中の2017年2月14日に、次期学習指導要領の改定案が出された。「幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント」のうち「各学校におけるカリキュラム・マネジメントの確立」の中に、「『主体的・対話的で深い学び』の充実には単元などの数コマ程度の授業のまとまりの中で、習

得・活用・探究のバランスを工夫することが重要。」とある。国語科で受け持つ言語能力の育成と他教科と関連させる言語活動を見極めて単元を創造する力が教師に求められていると考える。この授業実践を改善して、魅力ある言語活動を単元にした国語の授業を学生に考えさせたい。また、国語の学習が基となるカリキュラム・マネジメントの可能性も追求していきたい。

今回の授業の反省から、大学での学び方について考えるために、2017年2月27日に本学で開催された第27回初年次教育セミナーに参加した。久留米大学安永悟教授から、協同学習の意義や技法、授業モデルを学んだ。協同学習という点で、筆者が実践してきた小学校の授業と大学の授業との関連が理解でき、時代が求めている大学生の学びの一端を知ることができた。

この実践報告を通して、変化に対応して一歩前進できた思いである。機会をいただけたことに感謝し、よりよい授業を目指していきたい。

参考図書・資料

- 白石範孝著「白石範孝の国語授業のつくり方」東洋館出版社 2009年
- 文部科学省「小学校学習指導要領解説 国語編」東洋館出版社 2008年
- 鈴木文子他編「南吉のふるさと」半田市教育委員会発行 2015年
- 知多地方教育事務協議会作成「知多地方教育計画案」2015年
- 「幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント」2017年2月
- 甲斐睦朗・高木まさき編「国語 四下 はばたき」光村図書 2015年
- 光村図書「小学校国語 学習指導書 四下 はばたき」2015年
- 田近洵一・北原保雄・三木卓編「ひろがる言葉 小学国語4下」教育出版 2015年
- 教育出版「ひろがる言葉 小学国語4下 教師用指導書 解説・展開編」2015年
- 安永悟講演「活動性を高める授業づくり—LTD基盤型授業モデルの提案—」2017年2月

受付日 2017年3月15日

受理日 2017年4月27日